

氏名	任 俊穎		
ヨミガナ	ニン シュンエイ		
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第746号		
学位授与年月日	2024年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉生と死の儀式に纏わるジュエリーの表現 〈作品〉「生と死の形而上」		
論文等審査委員			
（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科） 岩田 広己
（論文第1副査）	国立工芸館	主任研究員	北村 仁美
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科） 前田 宏智
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科） 藤原 信幸

（論文内容の要旨）

ジュエリーは人間の本能から生まれるものではなく、太古には超自然的な力を持つものと信じられていた。寒さから身を守るための服や、足を保護する靴、獲物を捕らえるための道具など、人類の生存にとって必需品のアイテムとは異なり、ジュエリーの始まりは人の精神と大きな関わりを持つ意味を持って生まれたと言える。太古から、貝殻や獣の歯、鳥の羽などが初期の「宝石」と見なされており、当時の人々はそういった素材を身につけることで、身体がそれらの動物と類似のエネルギーを得ると信じた。このようなイマジネーションや信念は、その後のジュエリーと人間の精神や感情との密接な関係の基盤を築いた。

金や銀などの貴金属は、素材の特性と希少性から、ジュエリーの素材として使用され、同時に呪術的な意味合いも持たされていた。これらの金属は神々や宇宙のエネルギーと繋がっていると考えられ、人間の生死を制御する力を持っていると信じられた。筆者が生まれ育った中国では、ある地域の文化において、銀は、月と同様のエネルギーを持ち、夜を照らし災いを払う力があるとされた。銀の装飾品は、中国人の生死に関する儀式や習慣に広く使用され、現在も受け継がれている。

筆者が生まれたとき、誕生のお祝いとして銀の腕輪と長命錠を家族から贈られた。これらは災いや邪気を遠ざけ、安全で健康な未来を願い意味が込められたものである。一方、幼少期、祖母の葬儀で「嚙（きん）口（こう）銭（せん）」という葬儀の風習を知るようになった。祖母の口に銀の指輪が置かれ、指輪の銀の光沢と生気を失った祖母の灰白色の顔は対照的に写り、不思議な光景として筆者の脳裏に今なお鮮明に残っている。これらは恐ろしくも美しくもあり、言葉では表現しがたい複合な感情が銀の輝きの中に混ざり合った。このように、中国においてジュエリーは家族の愛を象徴し、生者と死者の間の精神的な絆と特別な精神性を孕んでいるものである。そして10年後、再び祖母の家を訪れると、誰も住んでいない家は経年劣化による大きな変化を見せていた。以前使用されていた鉄の道具は、錆と腐食により以前の鋭さを失い、雨や風、光から受けた自然現象による痕跡を残していた。この時、時間の経過と生命の無常、衰えに対する無力感のようなものを感じた。これらの経験は、筆者の潜在意識の中で「銀と鉄」、「生と死」を繋ぐ重要な根源となっており、本論文と作品の中でも、「銀と鉄」、「生と死」を中心に研究と作品表現を行った。

本論においては、まず生と死の儀式に関わり、ジュエリーで使用された素材や、表現について、歴史的および民族学的アプローチから明らかにした。次に、現代ジュエリーの文脈を踏まえ、創作者としての立場から、自身の制作で使用する素材である銀と鉄について、素材の革新と解釈、テーマの独自性、物語性を思考し解説する。これにより、自身の経験を基に、昔から使用されてきた金属素材を新しい視点で見直し、再定義し、過去の定義を背景に現代のジュエリー造形表現の可能性を探究することができると考えた。

からである。

そのため、本論文では以下のような構成をとる。

- ・第1章では、歴史的な観点から生と死の儀式におけるジュエリーの造形、材料、象徴などについて分析した。

第1節では、自分のアイデンティティと経験の基盤となっている、筆者自身の幼少期の長命錠や銀の腕輪、祖母の葬儀における嚙(きん)口(こう)銭(せん)についての歴史的な風俗と記憶に焦点を当て、調査と研究を行った。

第2節では、中国の少数民族ミャオ族の銀飾りの文化を取り上げ、銀飾りにおける神話や、造形表現を研究した。「生」とミャオ族の銀のジュエリーの関係に着目し、「生」という広い概念を月や蝶などの具体的な要素とどのように関連付け、どのように生への祈りを具現化するかを明らかにした。

第3節では、「死」とイギリスのモーニングジュエリーを例に、その時代の人々が死を悼むためにどのようなモチーフ、造形、素材、寓意、象徴などを使用したかを研究した。

- ・第2章では、現代ジュエリーの文脈における、「生と死」と素材及び造形表現の関係に焦点を置き研究を行った。

第1節では、現代ジュエリーにおける作品テーマの独自性の表現、素材の解釈の重要性を説明し、先行研究の例を挙げ、自身の創作の思考に導きを与えた作品を紹介し、作品の背後にあるストーリーを紹介する上で、銀と鉄の素材を使用する必要性を導き出した。

第2節と第3節では、筆者は自身の作品で使用した銀と鉄の2つの素材について解説した。まず、歴史と美意識の視点から銀という素材がどのように使用されてきたかを紹介し、その後、筆者の過去の作品とストーリーを通じて、素材に対する自身の理解と感情を説明し、最終提出作品がどのように進化してきたかのプロセスを解明した。

- ・第3章では、提出作品における概念、構成要素について、生を象徴する胡蝶蘭、死を象徴する幾何学的な形を説明し、次に作品がデザインからジュエリー作品になるまで、根幹となる銀と鉄についての必要性、用いた素材および技法と制作のコンセプトと関連した事項を述べた。

本研究の結論として、筆者は論文「生と死に纏わるジュエリー表現」と作品「生と死の形而上」の研究を行った。まず始めに民族や家族の死生観、生と死に対する歴史的な儀式、風習の事例を解説している。そして自身の日常生活の体験の中から、生と死における詳細な感情をジュエリーとして形成し、作品を鑑賞する側である人々の日常生活に潜在する「生と死」に対する感受性を高めることを試みている。「死に向かって生きる」という命の悲しさ、無常。死が存在するからこそ生まれる、生の中の美しく感動的で、暖かい瞬間をより大切に、ポジティブな生き方をしよう、ジュエリーを通じて伝えたいと考えた。

そして、学部 の頃、中国で様々な素材を用い、人の感情を言語の代わりに素材で表現することを試み、ジュエリーと人体の関係を中心に学んだ。そして、日本で東京藝術大学において彫金分野の伝統技法を習得する中で、工芸における技術の重要性に気付かされた。制作の過程において、手と道具、素材や技術が相互に関係し、徐々に技術を習得していく中で新しい感動やインスピレーションを得ることができた。筆者にとって、作品のテーマと素材、その技法は分けて考えることはできない。また、伝統的な材料に縛られず、なおかつ新しい材料を安易に使用せず、最も素直な感情に基づき表現に適した素材や技術を選択する思考に至った。

今後は金属という素材や彫金技法の歴史的文化と伝統への尊重や感動を受け継ぎ、ジュエリーの世界において金属材料やそれに伴う技術に対し、時代に即した新しい価値観や視点を見出し、現代のジュエリーにおいてさらに多くの表現の可能性を発信することを目指している。

(論文審査結果の要旨)

任俊穎氏による博士論文「生と死の儀式に纏わるジュエリーの表現」の審査結果要旨は以下のとおりである。

本論文は、自己の表現の基盤となるテーマ「生」と「死」について、歴史的研究から出発し、同時代の芸術表現について考察を重ねた上で、自身の造形表現の特異性と手法について明らかにしたものである。そのなかで任氏は、20世紀以降に興隆した近現代の芸術思想を踏まえ、ジュエリーの伝統的素材である銀や鉄を、現代においてどのように捉え直すことができるのか、その可能性を問うている。そして、作者の出自及び経験をベースに、日常において感じられた出来事をジュエリーという表現形式において具現化し、昇華する手法を見出した。論文のなかで任氏は、「銀」と「鉄」のテクスチャーや色、あるいは錆といった金属素材ならではの特性と、幾何学的形態の組み合わせによって、生と死を相携えて生きる日常や人々へのオマージュともいうべき作品として結晶させた自己の制作プロセスを明らかにしている。

2023年12月18日の博士論文最終審査会では、約40分の発表の後、質疑応答を行った。自己の作品が成立する過程と関連する諸問題を扱った本学位論文は、明確な問題意識に基づき丁寧に研究がなされているとの評価を得た。「生」と「死」という大きなテーマを含んだ任氏の作品は、世界中が大きな影響を受けたCOVID-19を経験した現代社会ならではの問題を色濃く反映し、深い精神世界をもたらした、として高く評価された。日本語を母国語としない環境を考慮して、日本語としての表現の自然さや表記の統一を、注意深く確認し、修正に万全を期すこと等の指摘があったが、研究を通して、現代に即した表現の道筋を見出しており、今後の発展が期待されるとし、審査委員全員一致で合格とした。

(作品審査結果の要旨)

作品題目を「生と死の形而上」として、15点のジュエリー作品が提出された。それらは自身の原体験となる誕生時のエピソードや祖母の葬儀における想いなどから端を発する「生と死の儀式に纏わるジュエリーの表現」として述べられたようにジュエリーに対しての本人の意識(提起)から制作されたものである。過去の経験や記憶から抽出されたもの、そして自己の視点から生まれてきた作品は凛とした印象を与える。これまでの研究制作の蓄積と、素材や手法に対する本人の感性は評価すべきものである。

制作に用いられている素材は、銀と鉄である。自己の表現の必然から、銀は白い光沢から生へのイメージを導き出している。そして鉄の持っている錆や腐食という特質から、生命の無常や生から死への過程を印象づけている。実際には本人の素材体験や、素材が持つ表現の可能性に対しての研究結果が現れている証である。銀と鉄それぞれの素材感の活かし方も良いが、組み合わせのバランスの効果も成功している。技法的には、銀の彫りなどその完成度の高さや繊細さは、伝統的な技術の研究と習熟が伺える。また鉄の仕上げ(錆びつけ)に関しても、化学的、実際的な研究に基づき、それぞれの作品に合わせて工夫して施されている。作品はいずれもジュエリーとして制作されたが、ジュエリーとしての要素も考慮され、その組み立てや仕上げなどは、博士の制作であると評価できるものである。

表現の基調となっている銀による蘭の花のモチーフは、本人の経験や記憶から導き出されたものであるが、素材感、技法上も十二分に練り上げられたことが伺える。生と死につながる清冽な印象をもたらした、作品から感じさせる感動の重要な要素となっている。

「Birth」や「Warn blessing」などには、原体験やリサーチした長命錠から発想されているが、本人の感性からなる新たな現在の表現、造形としての魅力を感じさせる。「Balance of life」の8点の作品

は、生命の尊厳を感じさせるためにシンメトリーの端正な造形が工夫されている。それぞれの銀と鉄の組み合わせ、それによって生み出される空間が美しい。「The light of Memory」「Mist in life」「The borderline between life and death」は日常の中で本人が感じた潜在する生と死をコンセプトにしたがい、象徴的な造形となり高い表現を引き出している。

以上の作品審査における観点や評から、博士学位審査における作品審査として高く評価するものである。

(総合審査結果の要旨)

申請者の任俊穎氏は論文題目を「生と死の儀式に纏わるジュエリーの表現」、作品題目を「生と死の形而上」と題し、ジュエリー領域において歴史、文化的な背景の検証を踏まえ、生命があるものとして不可避な「生と死」という奥深いテーマを軸に、自身が経験した事項を取り上げた表現を通して、ジュエリー表現の自らの方法論と表現を見出すことについて研究を行った。

論文では東洋の美的価値を通じたジュエリー表現をテーマとする研究から、世界を震撼した感染症によるパンデミックの体験により、生命において不可避な「生と死」をテーマに、母国において死を弔う儀式に用いられるジュエリーを取り上げる事から始まり、中国の少数民族ミャオ族の「生」を象徴する儀式に着目した。また、表現の方向性を示すものとして近現代のジュエリー表現の事例を取り上げ、自身の作品の方向性を見出すことを示している。また、同時に素材と彫金技法を表現の着地点のメタファーとして活かしていることを論じており、研究に対し十分な説明がなされていた。

研究作品においては2023年12月15日から開催された博士審査展にて、研究作品「生と死の形而上」を題目とした15点のジュエリー作品を展示した。論文でも述べているように

「生と死」について着目した要素として、「生」を象徴とする胡蝶蘭と、それを表現する上で銀素材に彫りを施し生き活きとした生命感を表現している。また、それとは対照的な「死」を象徴するものとして、錆びた鉄素材を用いて、棺や墓石、錆びた建造物などからミニマムに形を抽出している。死を連想させた生活の風景をトリミングし、相対的な要素が相乗効果をもたらす象徴的な作品として昇華され、展示方法も墓地を模し印象的な世界観を醸し出す展示構成になっていた。

2023年12月18日には40分のプレゼンテーション及び口述試問を行い、作品の考えや論文について審査員より質問においても明確な回答であり、今後の活躍を期待できるとした。論文の表記、文言等の若干の修正をするように指摘はあったが、総合的に十分な研究成果として認め、審査員全員一致で合格とした。